

令和元年度 第1回 高校生川柳 受賞作品 講評

大賞	【句】また明日 手を振りながら 伸びる影	作) 小林 輝 様 (啓明学館高等学校)
	【講評】高校に入学して友人もでき、学校生活にも馴染んできた頃でしょうか。放課後、生徒らが家路につく頃、みなほっとする様子に加え、夕暮れ時の空の色まで見えるような情感あふれる秀作です。	
傑作賞	【句】知らぬ間に スパイになってる 女子の闇	作) 氏原 未幾 様 (啓明学館高等学校)
	【講評】仲よしグループだけの秘密のはずなのに、グループ以外の人知っていた。他のグループに通じているだれかがいるのか。それとも自分がスパイとして疑いの目を向けられているのか。そんなちょっと怖いリアリティを、闇という言葉を使ってコミカルに詠んだ作品です。	
傑作賞	【句】何になる ずっと鏡とにらめっこ	作) 長尾 采音 様 (愛知県立木曾川高等学校)
	【講評】自分の人生はこれからどうなっていくのか、という将来への不安でしょうか。それとも今、何か悩みごとがあって、どうしていいかわからず悩んでいるのでしょうか。悩み、迷い、不安、それらは若さの証(あかし)。そんな若い悩みが伝わってくる作品です。	
傑作賞	【句】待ちわびた 弁当あければ 箸がない	作) 足立 葵 様 (星城高等学校)
	【講評】「待ちわびた」で期待感を盛り上げ、「弁当箱を開ける」でクライマックス、そこに一転して「箸がない」というオチをつける。短い中に序破急ともいべき、ストーリー展開をこめたうまさ際立つ作品です。	
傑作賞	【句】サンドウィッチ 父の手作り 朝食べる	作) 井上 美空 様 (星城高等学校)
	【講評】父の手作り、これも、最近の世相を反映しているのでしょうか。ひょっとして昼のお弁当も作ってくれたのかな、それとも昼は学校で売ってるお弁当を買うのかな、などといふ余計な心配までしてしまいそうな作品です。	
傑作賞	【句】あと少し 平行棒の 向こう側	作) 大下 音々 様 (啓明学館高等学校)
	【講評】療法士さんと二人三脚で両手でつかまりながら歩行訓練をしている患者さんの姿でしょうか。あと少しというところに、温かく見守る思いが伝わってくる秀作です。	
傑作賞	【句】「客は神」 笑顔貼りつけ 神対応	作) 羽尾 絢加 様 (啓明学館高等学校)
	【講評】選者もファストフードのお店でアルバイトの女子高校生の笑顔とキビキビした接客態度に感心したことがあります。だれしも心のうちはいろいろある。でもそれを抑えてお客さんには笑顔で接する、商売の基本ですね。殺伐としたニュースも多く聞こえる昨今、地道にがんばってるこんな若者がいることも知ってほしい、という思いもあります。	
傑作賞	【句】光さす 私の心に その笑顔	作) 深瀬 千賀 様 (啓明学館高等学校)
	【講評】医療の現場、患者さんの立場からの作品です。普段、元気なら気にすることもないのですが、人間だれしも病気や怪我をすると心配や不安で心が弱くなるもの。そんなとき、病院の人から笑顔を向けられると、暗闇に光が差しこむようにほっとするものです。そんな気持ちを忘れないで欲しい、という読み手に対するメッセージとも取れる作品です。	

傑作賞	【句】参考書 買って満足 手をつけず	作) 加藤 カ久 様 (名古屋大学教育学部附属高等学校)
	【講評】これは思い当たるところがあります。学生時代のみならず、おとなになってからも、よし読もう、今日はいい本を買った、そんな気持ちになったのはいいけれど、いつしか慌ただしさの中で忘れ去られ、ふと気づくと本棚に置きっぱなしになっている本が少なからずあるものです。いつしか手にとって、読む日が来るだろう、そう思いつつ。	
傑作賞	【句】いじめる子 謎の権利を 持っている	作) 宮澤 伊織 様 (愛知県立豊橋西高等学校)
	【講評】これも多くの選者が選んだ作品です。昔からこのような現象は知られていた、今の言葉で言えば、スクール・カーストといったところでしょうか。「なぞ」という言葉にこの現象の本質を突く鋭さと、権利という法律用語をさらりと入れているところに作者の言語感覚の豊かさを感じます。	
傑作賞	【句】春が来て 自信が付いた 4年生	作) 佐治 美雨 様 (愛知県立横須賀高等学校)
	【講評】定時制高校に進学することになった理由、経緯はきっといろいろあるのでしょう。ひょっとすると入学した頃は、不安でいっぱいだったのかも知れません。だからこそ、最終学年、4年目の春を迎え、卒業も視野に入るようになり、何とか続けてこれた自分に対する自信も湧いてきた、春が来た喜びと同時に、そんな誇らしい気持ちが伝わってきます。	